

答 辞

寒さが残りつつも、次第に春の息吹を感じるようになったこの頃、私たち卒業生一同、今日ここに無事卒業を迎えることが出来ました。

入学から卒業までの二年間を振り返れば、それは想像していた以上に疾く、目まぐるしく過ぎたように感じます。

思い起こせば5年前の震災のときは、命に関わる危険こそ無かったものの、その後の社会的な混乱に、再び自分の足下が大きく揺らぐ感覚を覚えました。

あらゆる物が品薄になり、電力の供給が不安定になる現実を目の当たりにし、今まで自分が「他の誰かが作ったもの」を何の疑問も持たず、享受し消費してきたことに気づかされました。

そして、自らの手で何かを作りたい、生業としたいという欲求の芽生えが、この学校に入る大きな理由のひとつとなりました。

入学した当初は、著しく異なる男女の比率、年齢の差異に戸惑いを覚え、この先自分がこの環境に馴染めるのか、不安な日々を過ごしました。

しかし、幅広い年齢層で構成され、多様な価値観を持つ同級生と関わるうちに、その不安は解消されてゆきました。

実習も、最初の頃は右も左も分からず、無力さばかりを噛み締める日々でしたが、段階を踏むごとに、いつの間にか体得していたり、より細かく見えていたりする自分がいることに気が付きました。

技とは、頭で憶えるものではなく、日々の積み重ねで徐々に身体に馴染むものだと思感した次第です。

また、前学院長の池寄先生の授業では、間戸（窓）の語源・概念の成り立ちが詳らかにされ、その内容がとても興味深く印象に残りました。それが、後のとやま木造住宅設計コンペで生かされ、最優秀賞という思わぬ成果をもたらすことになりました。

職人を育てるというのは、樹木を育てることに似て、一朝一夕にしてならず、それぞれの木の特性を識り、それを生かし、時には辛抱強く待つことで、数年或いは数十年かけて実を結ばせることが本質なのだと思います。

今日卒業する私たちは、職人としては芽を出したばかりの苗木ではありますが、この学校で吸収した栄養をもとに枝葉を伸ばし、いつか実らせることを目指し、生涯学ぶ姿勢を忘れず、歩んでいきたいと思っています。

最後になりますが、本日ご列席頂きましたご来賓各位、棟梁方、並びに諸先生方のご多幸、ご健勝を心よりお祈り致しますと共に、職藝学院の今後益々のご発展を祈念しまして、答辞とさせていただきます。

平成二十八年三月二十日

職藝学院 建築職藝科

卒業生代表

加藤 早苗